

目標達成の鍵は 地域との連携と行動力



谷水利行 代表取締役



谷水大祐 支配人

2020年日本女子オープンは、32年ぶり2度目の九州開催となった。舞台は、ザ・クラシックゴルフ倶楽部。1995年に日本女子プロゴルフ選手権を開催し、2017年には日本シニアオープンゴルフ選手権も開催。そして昨年、日本女子オープンゴルフ選手権を開催することになった。その取り組み方には、注目すべきプランと実行がいくつかある。

ひとつは、地域との連携プレーの構築と行動力だった。

「我々の考え方として、ナショナルオープンの理念は【地域・企業・クラブ】の一体化にあると思っていますので、その3団体が、一緒にプロジェクトを進めていくことに、ナショナルオープンの意義があると思っています。

もちろん、それは前回、2017年のシニアオープン

での経験を踏まえたものです。

まずは、宮若市役所内にナショナルオープンプロジェクトチームを作って頂いて、クラブと自治体がナショナルオープンとしてどう街を盛り上げていくか、ここ（開催前の）1年半ぐらいかけて話し合ったんですね。

そのアウトプットとして、例えば大会1ヶ月前から、インターチェンジからノボリを出して貰ったり、ロードプリントさせて貰ったりとか、ここで宮若市の特産品販売させて頂いたりとか宮若地産の原材料を使っているクラブメニューを作ったりとか。いろいろなアイデアを構築して実行に移したわけです。もちろん、私どもから、お声掛けしました」

と、ザ・クラシックゴルフ倶楽部支配人の谷水大祐氏は語る。



若宮ICから倶楽部に向かう道路に大会ロゴがペイントされた

——コースサイドの方々に三位一体という理念があってもそれを、しっかりと実行するというのは中々難しいことだと思うのですが？

谷水支配人 私どもの経営スタイルは巻き込み型の参加性にあると思っています。社団法人ではないけれども、社団の良さを取り入れた経営もずっと心がけてきていました。理事会のもと、5つの委員会を作って役員組織も整備し、年に1、2回大きな会議をしながらクラブの基盤を作ってきたのですが、今回の日本女子オープンや前回の日本シニアオープンの時もメンバーを募って実行委員会を作って、クラブの未来の為に、大会を盛り上げる為にメンバーから広告看板とかご紹介いただくなど、メンバーを巻き込みながら進めていきました。

——実行委員というのは何人ぐらいの組織ですか？

谷水支配人 理事会と委員会で40名～50名くらいです。それとは別に代表（谷水利行氏）の親しい仲間有志の会があり、そこにも、オープン開催に向けて、よりビジネス的なご相談をさせていただくチームを作りました。そのチームには、コース側がついていけないぐらいのモチベーションがありました。「絶対広告協賛会社を何社集めるぞ」とか、「多くのギャラリーに観戦してもらおうぞ」みたいな勢いがありました。日本シニアオープンの時も、新記録を作ろうと取り組んでいたんです。それは（2015年開催の）ココパ（リゾートクラブ白山ヴィレッジゴルフコース）が最多ギャラリー記録を作ったので。そこに負けないという精神で数字を出したらメンバーがやる気になって、お尻を叩いてくれました。結果的には、台風があったりして目標は達成できなかったのですが、日本女子オープンの時は、トーナメント事業として、しっかり成り立つように頑張りましょうということをおっしゃって頂いて街とメンバーの協力でトーナメント開催を目指しました。

JGAと倶楽部理事・委員による
大会開催に向けた実行委員会総会



——元々、そういった機運は谷水さんの発想で出来上がったものなのですか？

谷水代表取締役 昔の話になりますが、まだバブルの余熱が非常に残っていた頃は、地域の皆さまに開かれたゴルフ場かという決断でそうではなかったと。地元のゴルファーからは近くて遠いゴルフ場と言われていたのを聞いて、1993年に私と現市長の有吉さんが役場の総務課長をしておられたので2人で宮田町にゴルフ協会作りましょうという話になり、そこで商工会議所の組合とかみんなを巻き込んで、人口2万人の街で250人ぐらいの会員によるゴルフ協会ができました。その皆さんは、1995年に開催した日本女子プロゴルフ選手権で、ボランティアとして相当な人数がお手伝いを頂いて、喜んで頂いたという大昔の経験がありました。それで、何か事を起こすのであれば地域の皆さま、勿論メンバーも巻き込んで一緒にやったほうが実りも大きいし、色んな意味でも助けになって頂けるということが、25年前の体験としてありました。

谷水支配人 宮若市はスポーツの街というビジョンがあってその一つに日本女子オープンが位置づけられました。ふるさと納税で納税をする際に、納税者が税金の使い方を選べるのです。宮若市では、市長のはからいで大型スポーツイベントの応援に使ってほしいという項目を作っていました。そういった形で、この町は日本女子オープンというコンテンツで、とにかく全国に名を挙げようと協力していただきました。

——開催コースサイドには、券売などコース整備以外の部分でも取り組まなければならないことがありますね？

谷水支配人 我々が大切にしている企業哲学の中に、物事は未来進行形で考えるということがあって、今の力じゃ足りないけれど2020年の日本女子オープンを目指して手を打つことによって、調整能力を与えて、そこに到達できるはずだということを常々話しています。最初の質問に戻りますが、実はナショナルオープンに手を挙げたのも、弊社内にビジョンミーティングというものがあって、とにかく否定なしにやりたいことを語ろう、未来を語ろうという中で、当時、会議にいた方が5年前に何気なく日本女子オープンをやりたいと言われたことが社長の耳に入って。とんでもないこと言っちゃったと(笑)。でも、調べるだけ調べてみようよと、スタートしました。もちろん走り出して立候補するときも、創設30年に満たないクラブがナショナルオープンを迎えることができるのか?という懸念はありました。地方の独立系の親会社がないゴルフ場ですと、資金調達の見込みも立っていないんですが、我々は弱小なりに、物事は未来進行形で考えようと。2020年に手を打つことによって、それに向けて自分たちの力を上げていけばいいんじゃないかという機運も上がりました。

——常日頃の人間関係がないと、なかなか協力してくれないのかなと思うんですが。

谷水支配人 当クラブは、1990年に開業して以来ずっと地域密着で、地元のお客様で生計を成り立たせています。もちろん、これからは基本は変わりませんが、人口が減っていくので、トーナメントを開催して東京や関西からもお客さんを集客して補おうという考えはあります。でも、地域密着型のお陰で、地域企業とのお付き合いが深くなり、その結果、今回の大会では、それまでの関係性の集大成をいただいたのかなという気はします。

大会ボランティア説明会の様子



クイーンNo.6(大会No.15)



クイーンNo.7(大会No.16)

——スタッフの機運が上がったということですが具体的には？

谷水支配人 努力目標が明確になることが一番大きいんです。JGAから木を切りなさいという話を受けて伐採しました。いろんな方から御心配の話を受けてきましたが、結論を言うと、うちのトップも含めてよかったという感想しかないです。本当にコースは良くなったし、喜びの声が多くなっています。木を切ったことで風通しもいいし、日も当たるので芝生も元気になって状態がかなり改善されました。それ以上に、ナショナルオープンをやることによって、自分たちも歴代の開催コースと同じステージに肩を並べないといけないという、明確な努力目標が出来ました。自分たちの名が売れるというだけでありません。明確に理想が見えながらも現実があり、そこに大きなギャップがある。それを埋める努力目標が見出されたことによって、自分たちがやるべきことが明確になったということで、モチベーションが上がりました。苦しい以上にやりがい、やってやろうという気持ちが強かったです。そこで日本シニアオープンをきっかけに意気込みが変わったのかなと思います。クラブハウスの人間も含めて。日本シニアオープンが終わって、改めてこのままじゃいけないと。日本女子オープンをもっと高い理想があり、そこに向けての努力目標ができました。全員がその目標を達成すべくやってくれたのかなと思います。



クイーンNo.8(大会No.17)



クイーンNo.9(大会No.18)

——コースも改造しました。その成果は？

谷水支配人 成果というお客様の声ぐらいしか測れないんですが、関東・関西のトーナメントコースの会員であるお客様からは、かなり高いご評価をいただいています。特にうちの15番から終わり4ホールはかなり美しいコースで、プレーのしがいがあるという声を頂いています。我々も開催前に、「JGAの監修はどうだったのか?」という取材を受けたんです。先ほど申し上げた通り、本当にやって良かったです。JGAのご指導の通り、できる限りやってきましたけど、本当に良くなりました。JGAの監修のもとでいろいろ話し合っていくと、昔は元々こういう風景じゃなかったのかとか、設計者はこうしたかったんじゃないかとか。開場から30年経つ中で、どんどん設計家の意図が薄らいでいるんじゃないかという話がほとんどで、加えて今世界のトーナメント、全米オープンがこうなっていると世界の潮流を聞かせて頂いて答えを出してくれました。原点回帰を超えて発展的回帰だった。ただゼロに戻るんじゃないですけど、今の潮流などをプラスして、発展的に回帰させてくれる監修だった。そういった意味で本当に良かったと思います。試合展開も強い気持ちがある人はスコアを伸ばし、そうじゃない人は落とす。技量の差が明確になったと思っています。そのような舞台を作るために指導いただいたセッティングディレクターに感謝しています。



大会告知の機旗が設置。NHK北九州放送局にて取材・報道された

——2020年は、コロナ禍で一般非公開という異例の事態でした。

谷水支配人 一般非公開での開催が決まったのが、8月末。それから大会までの2、3週間で広告などに協力を頂いている160社の皆様に連絡をしました。1日何人も手分けして回りました。いろいろ応援いただく中で、お礼としてのチケットをつけたので、どうなることかと経営的に非常に心配だったんですが、結論から言うと、契約解除や違約金等といった反応は特にありませんでした。その代わりにオフィシャルグッズつけてよとか、プレー券何枚かつけてねと依頼はありましたが、総じて「君たち大変だったね。でもこの中で大会を開催することによって、日本のゴルフ業界が元気になり、日本全体が元気になるだろう」と、マクロの視点で考えていただいて、背中を押していただいた声が9割5分でした。ある方は「関東・関西のゴルフ場をテレビでみるんじゃない。自分たちが普段通っているゴルフ場がテレビに映り、そこで1流の選手がプレーするなんて嬉しいことじゃないか」と。一般非公開でテレビ中継を見てくださいということに対しても、非常に温かい言葉で迎えてくれて、背中を押してくれたので、本当にそれが何よりの助けで。そもそもこの大会自体も地域企業の支援なしに出来ないものですが、最後の最後まで、地域企業に背中を押していただいて。7月の大雨、8月の日照りにコロナウイルスも重なって、非常に苦しかったんですが、最後は地域の方々から背中を押して頂いて、なんとか完走できたかなという感じですね。

——次にこういうイベントをやりたいとすれば何ですか？

谷水支配人 次はですか?(笑)、ナショナルオープンで1回経験すると、これに勝るものはないので、ナショナルオープンとして選ばれる会場であり続けたい、その努力を続けていきたいということの一言ですね。やっぱり選手の皆様も他の選手権とは違いナショナルオープンっていうとかなり気持ちを込めてやっている空気が素晴らしいですね。

——どうも、ありがとうございました。